



第28号

発行 弘前大学教育学部同窓会
〒036-8560 弘前市大字文京町1
TEL. 0172 (36) 2111 代表
編集事務局
弘前市豊原1丁目1の3
弘前愛成園立花園保育園内
TEL. 0172 (33) 6250



教員養成に思うこと

教育学部同窓会会長 木村清之助

最近私たち教員OBが顔を合せると決まって話題になるのが「教育」です。お互い何時までも教員なんだなあ、と嬉しく思うと同時に、内容はこれからの日本の教育は何処へ向かうだろう、と展望の見えない現状について暗くなることもしばしばです。

よくでる話題に「教育の総論論家」というのがあります。原子力や宇宙の話と違って教育については誰でも口出しでき、身勝手な意見が言える。学校はそれを黙って聞く。丁度ボクシングのサンドバッグみたいにかかれ放題ではない

か、ということですが。

先日卒業生の集まりで、「昔は先生に叱られたことが親にバレると、また親から叱られるので隠したものだ」とか、「メグセゴドシナ! (恥ずかしいことをするな)」と、よく親から言われたものだが、今はどうなっているの?」など話題になりました。確かにこれはどこの家庭でもしつけの基本としてなされたことでした。

そう言われてみると、いつの間にか「恥ずかしい」という言葉も耳にすることが無くなってきていると思います。

社会や組織を維持する上で重要な基準の一つである「権威の分化とその明瞭度」が、誤った平等とか人権という言葉の下に失われてきた結果でないでしょうか。

先日青森市で、教育学部主催の「教員養成学研究開発センター」発足2周年記念シンポジウム」が開催されました。これは全国初の文部科学省から認定されたセンターです。教育学部では優れた専門職としての教員養成のための改革に一丸となって取り組んでいます。このようにして養成された教員が、将来学校の教育現場で身勝手な雑音に惑わされることなく子どもと向き合い、存分に全力投球が出来るように教育環境を整備してやりたいものです。



青森より、新たな教員養成改革の挑戦が始まった!

教育学部長 佐藤 三三三

温暖化がもたらす地球と人類の危機が、今まで以上に声高に叫ばれるようになった。そのような状況の一端を、今年もまた雪の異変を通して肌で感じている。

平成十七年の冬は、弘前の観測史上最高の大雪になり、昨冬は、さらにそれを上回る記録的な大雪となった。我が家ではカーポートと納屋がつぶれるという惨事にも見舞われた。しかし、今冬は一転して、雪がほとんど降らず、一月の末には、春三月の雪解けの頃を思わせる気温と風景となった。環境の変化に合わせて、桜の花が咲

いたり、動物園の熊が冬眠をやめて外に出てくるなどの珍事が相次いでいる。

さて教育学部とはいえ、附属学校園共々、異常気象に惑わされつつも、進むべき方向をしっかりと見据えて、今年もまた頑張っております。

昨年は、教育学部の前身である師範学校創設から数えて百三十周年の祝賀の行事を盛大に実施いたしました。もとより、同窓会の皆様の物心両面からの絶大なご支援があつてのことでした。改めて、心より御礼申し上げます。

今年、文部科学省が一億円強の予算をもって、弘前大学教育学部にのみ設置を認めた『弘前大学教育学部附属教員養成学研究開発センター』の開設二年目を記念して、青森市の青森国際ホテルで「記念シンポジウム」(二月十三日)を開催いたします。同窓会にも「後援」をいただき、パンフレットに「教育学部同窓会」の名前を書かせていただきました。シンポジウムのテーマは、『青森より、新たな教員養成改革の挑戦が始まった! 弘前大学教員養成改革の現状と課題を語る!』です。附属学校園は『ユニバーサル・スクール構想』を実践しています。末筆になりましたが皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。



弘前大学教育学部創立 百三十周年記念事業報告

教育学部百三十周年記念事業実行委員会
委員長・副学部長 星野 英興

平成十八年九月三十日(土)、晴天のもと、教育学部創立百三十周年記念行事が盛大に執り行われました。記念式典・コンサートには二百二十名、祝賀会には百六十名の参加がありました。教育学部同窓会からは、木村清之助会長、工藤睦男副会長及び斉藤善三初代会長が来賓として参列されました。

百三十周年記念事業実施にあたり、弘前大学教育学部同窓会からは、百万円のご寄付を賜りました。実行委員会を代表して、衷心よりお礼申しあげます。このご厚志を末永く残すべく、創立百三十周年記念庭園に建立されました「青森県師範学校校歌歌碑」に、「弘前大学教育学部同窓会」の名を刻させ、



せて頂きました。教育学部にお立ち寄りの折には、是非西側(富士見町側)にあります記念庭園にお立ち寄り頂ければと思います。午前十一時からは記念庭園開園式・歌碑除幕式が執り行われ、木村会長が来賓として参列されました。また、時を同じくして創立五十周年記念会館エントランスホールを会場に、三十余の記念展示が公開されました。

午後一時、創立五十周年記念会館「みちのくホール」を会場に、ファンファーレ演奏、教育学部附属小学校六年生全員による師範学校校歌斉唱で幕を開けた記念式典の第一部では、佐藤三三教育学部長から、寄付金を賜りました木村会長に感謝状が贈呈されました。「教員養成の今昔」―世代をつなぐ―と題する第二部では、木村会長から「戦後間もなくにおける教員養成」のお話を頂きました。最後に、参加者全員で「未来に向けて進もう」を唱和し、記念式典を締めくくりました。

式典に引き続き、教育学部卒業生三十名を含む総勢四十六名で特別編成された「百三十周年記念オーケストラ」による記念演奏が行われました。ピアノソナタを含む演奏は参加者を魅了し、記念式典に一層の彩りが添えられました。

大学会館を会場に、山内千代子アナウンサー(教育学部同窓生)の司会で始まった記念祝賀会では、笹川皇人氏(教育学部同窓生)による力感溢れる津軽三味線のライブ演奏もあり、大いに盛り上がりました。工藤副会長によります締め乾杯で終宴となりました。

平成十八年十一月三・四日開催された弘前大学総合文化祭では、記念式典・祝賀会、記念庭園・歌碑等に関するスナップ、関連新聞記事、百三十周年記念パンフレット、ロゴマーク等の「百三十周年記念行事のパネル展示」が行われ



「創立百三十周年 記念式典に臨んで」

青森県師範学校卒業生 原子 進

「誇る歴史、初の式典」という見出しで、創立百三十周年のことが、平成十八年二月二十五日の朝刊に大きく報じられました。

そして迎えた最高にめでたい照耀(しょうりょう)天地の日、平成十八年九月三十日、未来永(とこ)ごう忘れ得ぬ心の記念日となりました。

明治九年県師範学校に端を発し県女子師範、青年師範等と教育という樹の幹を時代毎に太らせ、弘前大学教育学部へ……

歌碑の除幕、紅白の幕が静かに歌碑から離れ、そこには県師範学校の校歌の歌詞が……卒業以来まじめに歌う機会がなかった校歌をいま歌える……本当に久しぶりに仲間と腹いっぱい歌うことがで

ました。「世代をつなぎ未来に進む」教育学部の更なる発展のために、今後とも弘前大学教育学部同窓会各位様の力強いご支援をお願い申し上げます。

最後になりましたが、百三十周年記念事業実行委員会として、ほぼ一年間実行委員としてご協力賜りました、木村清之助会長、工藤睦男副会長並びに工藤光男様に、厚くお礼申しあげます。 ※弘前大学教育学部のホームページに「教育学部創立百三十周年」のサイトが、アップされました。

き、その感激はひとしおでした。師範学校記念庭園も完成し、師範学校を卒業した私たちとしては新たに憩(やすみ)う場、懐旧(わいじゆ)の場が増えたことを喜ぶたいと思います。更に式典のいの一(いち)番に附属小学校の子等のさわやかな歌声によって幕を開け、流れるメロディーは師範学校々々歌「山河秀(うま)づる七洲の……」創立記念式のスタートとなった校歌、百三十周年の歴史にその一歩を刻んだ校歌を教育学部では大事に思(おも)ってくださっている「あかし」と理解し、胸が熱くなるのを覚えました。

遠藤学長は祝辞の中に「師範学校志」から幅広くその内容を活かしてくださり、学校志編集に携わ

った一人として有難さに感服いたしました。

九月三十日の記念行事を前後して、幾度か新聞紙上に「青森師範学校」の名を目にする事ができこれまで遠い彼方的存在だった師範学校も太いパイプで教育学部と結ばれたこと……特に式典当日まで、佐藤教育学部長、星野実行委員長には、師範同窓会に数々のご配慮をいただき、おそらく式典当日まで千思万考の日々ではなかったかと推察申し上げておりました。各同窓会長からの母校の今昔を耳にした時、生きて来た時代々々のすがたが脳裏に投影され、百三十周年という記念の日(ひ)にふさわしい一幕でありました。

小山会長の発表の終りに同窓会事務局長の「知と愛の枝を繁らせ教育の、大樹は百三十年、梢(えだ)そよがす」の歌が印象的でした。

祝賀の宴に於ては先輩後輩(せんぱいこうはい)久しぶりに旧交(きうこう)をあためたため、最高の雰囲気(ふんいき)に浸(ひた)ることができました。ほとんど会うことのなかった県南の方々、数多く参加してくれた同期の方々との盛り上がりも「さい」たるものでした。三校の校歌のオリジナルは貴重な記念の品となり毎日のように鑑賞(かんしょう)しております。

ひとつ花(はな)が咲き、そして多くの葉(は)を繁(は)らせることから、後世に残る大きな成果(せいこく)をあげ発展(はつぜん)していくことを、古人(こじん)いわく、「花開五葉」と(出典「少室六門」)……

教育学部の「一花開五葉」たるんことを、心(こころ)から念(ねん)じております。



教員養成学研究開発センター発足 二周年記念シンポジウムを終えて

教授 平井 順治

全国で弘前大学教育学部だけが持つ「附属教員養成学研究開発センター」が発足してから二年が経つ。「この二年の歩みを、県内外の皆さんに紹介し、教育学部が変わったことを知ってもらおう。また、後半の三年間への意見を聞こう。」そんな素直な気持ちで企画したシンポジウムであった。

二百人は参加してほしいという願望をもちながら、青森国際ホテル「万葉の間」を会場と決めた。難しいだろうなというのが本音であった。

平成十九年二月十三日当日は、県内教育行政関係者五十七名、小・中・高等学校関係者五十八名、PTA関係者二十八名など合計二百四十名もの参加者が集まった。運営者がサイド椅子席に移動しなればならない程の盛況に、教員養成に対する熱い期待を感じ、身震いする思いであった。

シンポジウムは三部構成とした。一部は、基調報告「弘前大学の教員養成改革の概要と教員養成学研究開発センターの活動」である。

基調報告1として、佐藤三三学部長が、学部教員全員が独善性を捨てて、心意気としての「青森から、教員養成改革を！」と本気で改革に取り組んでいることを宣言した。

基調報告2では、遠藤孝夫教員養成学研究開発センター長が、「教員養成学の創出と全国初のセンター

発足の経緯」について説明した後、「教職入門」「Tuesday実習」「教員養成総合実践演習と学校サポーター実習」等の新しいカリキュラムについてプレゼンテーションを行った。教育現場で実践を積んだ客員教授や非常勤講師を加えた指導体制、教育委員会との密接な連携にも触れながら、教育学部が教員養成に責任を果たすことを強調した。

二部は、「教育界の現状と教員養成への期待」と題してパネルディスカッションが行われた。

田村充治青森県教育長は、課題を①学習状況の実態、②いじめ、不登校の実態、③特別な支援を必要とする児童生徒の実態とに分けて話した後、教員養成機関としての弘前大学への期待を述べた。

横山勉青森県小学校長会長は、確かな学力の向上と豊かな心の育成等の小学校教育の課題を述べた後、「学生時代の豊かな体験に支えられた実践的教員の養成」を求めた。

花田惇青森県中学校長会長は、学習指導での実践的な指導力は勿論だがと前置きした上で、「道徳教育」「キャリア教育」「特別支援教育」を推進していく力の育成、「学校の危機管理」等、教員養成への七つの要望を行った。

文部科学省専門教育課の安部栄一課長補佐は、教員に採用された者に占める教員養成大学・学部出

身者の割合がかなり低い校種があることに触れ、一層の努力が必要であることを指摘した。

フロアーからも、「学校現場の改革と教員養成改革の一体化が必要である。」との意見も出された。

三部は総括的提言である。

東京芸芸大学教員養成力リキラム開発センターの岩田康之助教授は、「適正規模にある弘前大学の有利さ」を指摘しながら、①全国からの人材を育成する教員養成の「名門校化」②「津軽育ち」の教員の「輸出」③「地域」に根ざすことの具体的な在り方の発信④学内の教員養成のコーディネーター役、を提言とした。

この会で交わされた多くの意見は、必ず次のステップとなると確信しながら散会とした。成功に導いてくださった多くの方々のご協力に素直に感謝したい。



平成十八年度教育学部 同窓会・教育学部懇談会

第三回となった平成十八年度弘前大学教育学部同窓会・教育学部懇談会は、平成十八年十一月二十九日（金）午後四時から教育学部第一会議室で開催された。

懇談会には、学部側からは佐藤三三学部長以下十八名、同窓会側からは木村清之助会長以下十三名の出席のもと、星野英興副学部長の司会で行われた。

佐藤学部長からは教員養成に関する取り組みと教育学部創立百三十周年記念事業の協力に対するお礼があり、その後担当教官より教育学部の現状が報告された。中でも教員養成学研究開発センターの活動について、最近の活動が報告された。

教員養成学研究開発センターは、常に社会が必要とする教員の養成に関われるよう、自らの教員養成活動の総体を研究対象とし、その改善のための方策を提案し、附属学校園と一体となって検証し実現するための実践的研究をするもので、日本で最初の研究施設だとの説明があった。

学部では、高度の専門性を有し実践的指導力のある教員を養成するために「自律的発展力を備えた教員養成力リキラム」の開発や実施、検証を行い、その目玉となるものが、「Tuesday学習」と「自律的発展力向上科目」で、現在センターが学内外の機関と連携をとりながら進めており、その

成果は近々発表の予定であるとのこと。

その後、同窓会から学部への要望事項が出されたが、教員の採用状況やサークル活動、ボランティア活動について報告がなされた。学部全体に活気があり、教官達の意欲が伝わってくる懇談会であった。



平成17年度決算

Table with 4 columns: 収入の部, 17年度予算, 17年度決算, 備考. Rows include 会費, 繰越金, 繰入金, 雑収入, 計.

Table with 4 columns: 支出の部, 17年度予算, 17年度決算, 備考. Rows include 総会費, 評議会費, 支部活動費, 通信費, 就職対策費, etc.

2,584,297 - 2,545,280 = 39,017円 (次年度へ繰り越し)

平成18年度予算

Table with 4 columns: 収入の部, 17年度決算, 18年度予算, 備考. Rows include 会費, 繰越金, 繰入金, 雑収入, 計.

Table with 4 columns: 支出の部, 17年度決算, 18年度予算, 備考. Rows include 総会費, 評議会費, 支部活動費, 通信費, 就職対策費, etc.

弘前大学教育学部130周年記念事業に係る特別援助として特別会計基金より1,000,000円予算化

庶務報告

- 17. 3. 同窓会加入の案内
17. 5. 25 総会案内の発送
17. 6. 11 平成17年度総会
17. 6. 集団模擬面接試験
17. 7. 同窓会費納入の依頼
17. 11. 2 同窓会と教育学部懇談会
18. 3. 7 会報「あすなろ27号」発行
18. 3. 24 弘前大学卒業式・祝賀会
18. 6. 3 事務局打ち合わせ
18. 6. 3 会計監査

平成十八年度弘前大学教育学部同窓会の総会は、平成十八年六月十七日(土)午後二時より、パークホテルにおいて行われた。当日の参加者は二十六名で少なかったものの、議長に花田幸三氏(弘前市)を選出し、話し合いが行なわれた。話し合いは、平成十七年度決算の報告と平成十八年度予算が審議された。また、年々厳しさを増す教員採用試験に対する同窓会としての援助活動と納入率の減少している会費について活発な意見がかわされた。

平成十八年度 弘前大学教育学部同窓会 定時総会報告

事業計画

特別会計基金(定期預金関係)

- 1. 総会 青森銀行 8,526,404+ 2,047= 8,528,451円(利子)
2. 教員採用試験の援助活動
3. 会報「あすなろ28号」発行
4. 同窓会と教育学部との懇談会 みちのく銀行 8,611,621- 500,000= 8,111,621円(H17予算へ)
5. 五所川原・北郡支部コンサート 8,111,621+ 2,067= 8,113,688円(利子)
6. 教育学部創立130周年記念
7. 弘前大学卒業式・祝賀会
8. その他

- 名譽会長 佐藤 三三(学部長)
顧問 齋藤 善三(弘前市)
副会長 木村清之助(弘前市)
会長 笹 良夫(青森市)
支部長 弘前・中郡支部 笹森 義男(弘前市)
1. 支部長 弘前・中郡支部
2. 黒石・平川・南郡支部 横山 岩雄(猿賀小)
3. 五所川原・北郡支部 齊藤 光正(梅沢小)
4. つがる・西郡支部 屋敷 政勝(永田小)
5. 青森・東郡支部 奈良 永年(青森市)
6. 八戸・三戸郡支部 八戸 三戸郡支部 澤田 明久(白銀南小)
7. 三沢・十和田・上北郡支部 和田 上北郡支部 廣野 雅実(上北中)
8. 弘前大学教育学部支部 津田 久文(下北教育事務所)
9. 弘前大学教育学部支部 鎌田 耕太郎(教育学部)
10. その他の地区支部
1. 評議員 弘前・中郡支部 赤石 和夫(弘前市)
2. 黒石・平川・南郡支部 秋田 豊(弘前市)
3. 五所川原・北郡支部 大崎 啓子(水元中央小)
4. つがる・西郡支部 阿部 和生(一野坪小)
5. 青森・東郡支部 吉田 秀一(浜館小)
6. 八戸・三戸郡支部 成田 誠二(八戸市)
7. 三沢・十和田・上北郡支部 梅田 真規(六戸町)
8. 弘前大学教育学部支部 藤田 繁規(十和田市)
9. 大学教育学部支部 村山 正明(教育学部)
10. 常任委員 相馬 正栄(花園保育園)
11. 相木英理子(弘前三中)
12. 枝村 則彦(附属小)
13. 野呂 徳治(附属実践センター)
14. 小林 央美(教育学部)
15. 相馬 正栄(花園保育園)

平成十八年度役員